

考古資料としての蓮月焼

千葉 豊

1 蓮月焼とは

大田垣蓮月 世の中が激しく揺れ動いた幕末維新という時代に、清貧をつらぬき、85歳で天寿を全うした尼僧が存在した。大田垣蓮月である。手元にある広辞苑（第4版）には、「おおたがき」の見出し語の下に「ー・れんげつ【大田垣蓮月】江戸末期の女流歌人。名は誠（のぶ）。京都の人。夫の死後、尼となって蓮月と号す。陶器を製し自詠の歌をつけて世に賞美され、東山に高潔の生涯を送った。歌風は優美繊細。家集「海人の刈藻」。(1791-1875)」とある。本稿で取り上げる蓮月焼とは、「東山に高潔の生涯を送った」蓮月尼が生活の糧として幕末から明治初年にかけて製作し、「世に賞美され」た、やきものことである。

大田垣蓮月の生涯については、多くの書物があるから⁽¹⁾、それらに譲り、ごく概略のみを記すにとどめる。寛政3年（1791）、京都の三本木に生まれる。名は誠^{のぶ}。幼くして、知恩院の坊官・大田垣^{てるひさ}光古の養女となる。18歳で大田垣家の養子・望古^{もちひさ}と結婚。1男2女をもうけるが、いずれも幼くして病没。夫とも離別する。その後入家した古肥^{ひさとし}と再婚。1女をもうけるが、夫ともども病没するなど、その前半生は恵まれたものではなかった。文政6年（1823）、夫・古肥の没後、養父とともに、33歳で出家し、蓮月と号した。

天保3年（1832）、養父・光古（西心）と死別した42歳以降、知恩院真葛庵から岡崎村へ移り、生活の糧として、やきもの作りを始めた。また優美繊細な歌を詠み書画をよくするなど、諸芸にも通じていた。若き日の富岡鉄斎が学僕として蓮月を助け、蓮月も終生、鉄斎を援助した。蓮月はやきもの作りを始めるようになって、岡崎から聖護院、北白川という洛東の地に居を構えたが、一所にとどまらず、生涯に三十数回もの引っ越しを重ねたので、「屋越蓮月」と呼ばれるほどであった。慶応元年（1865）には、西賀茂神光院の茶所に移り、晩年の10年間をここで過ごし、明治8年（1875）、85歳で没した。

蓮月焼の特徴 最初に、伝世品や文献に基づいて⁽²⁾、蓮月焼の特徴を整理しておく。

1) 自詠の歌で製品を飾ったこと：蓮月は製品を自詠の和歌で飾り「蓮月」と署名した。表現方法は、釘彫りと称される陰刻表現と、鉄錆を用いた筆書きの2種類がある。前者が多い。筆書きの場合は、絵と一体で表現した画賛様式のものも多い。

陶器を詩文で飾るのは、蓮月に始まったことではなく、京焼の世界では18世紀には尾形乾山が書画一体の境地を陶器に表現したことはよく知られている。19世紀に入っては、青木木米が詩文を陶器に写している。乾山も木米も、文人として陶芸に参画した人たちであり、蓮月もこうした「文人陶工」の系譜を引くと理解することもできる。陶器に詩文を記す発想は、乾山や木米などから学んだのかもしれない。ただし自詠の和歌を陶器に記すのは蓮月の独創であり、蓮月焼の本質をここに求めるべきだと思う。

2)煎茶器関係が多いこと：急須・土瓶・椀・煎茶椀・花生け・香合・皿・鉢・蓋物・德利・盃・鍋・涼炉などがあるが、茶器とくに煎茶に関係する製品が多い。この頃、文人からさらには一般の人へと、煎茶の風習が広まっていったことはよく知られている。当時の煎茶の流派としては、唐様風の文人派と和様風の宗匠派の2派があった。後者は、中国的趣味よりも、日本的伝統を重んじており、和歌を刻した蓮月製品は、こうした流派の志向と合致したものと理解できる⁽³⁾。

3)成形に、轆轤水挽き技法を用いず、手づくねあるいは型を用いて作陶したこと：蓮月焼は、手づくねで、指頭圧痕を残し、凹凸に富んだものが多く、また蓮葉を表現した蓋・椀などには型成形が用いられている。ここに専門陶工との技術的差異を見て取ることができる。型を用いる点については、従来あまり注意を払われていないが、発掘資料の観察からは、型を多用した可能性を追究してみる必要がある。

4)陶土は、岡崎から黒谷にかけての洛東の粘土を用いたこと：この一帯の粘土が京焼の原料となったことはよく知られており、蓮月も同じ土を用いた。

5)無釉焼締品と施釉品があること：土瓶・急須・蓋物などは無釉焼締が多い。椀・煎茶椀・皿・德利などは施釉品である。涼炉は無釉の土師質焼成である。合作品を除くと、磁器はほとんどなく陶器である。歌の表現方法との関係でみると、陰刻表現の場合は、焼締焼成、施釉ともにみられる。筆書きの場合は、所謂、下絵技法であり、鉄錆で歌を表現し、施釉して仕上げており、上絵の技法で表現したものはない。

6)蓮月以外の手になる製品があること：蓮月焼は、世上の評価が高まるにつれて、すでに蓮月存命中に、贋作品が出回ったようであるが、これらとは別に、蓮月本人が関与しつつ蓮月以外の人の手が加わった製品がある。西賀茂神光院に移ってからは、吉田安という農婦が手伝っており、「蓮月 安造」と署名のある土瓶も残っている。またのちに二代目蓮月を名乗る黒田光良も、蓮月に頼まれて作陶を助けていることが蓮月から光良へ宛てた手紙からうかがうことができる⁽⁴⁾。光良は、安政5年(1858)、聖護院村熊野神社の西、蓮月

の隣家に居住したことが縁で、蓮月の弟子となった。晩年には、陶土の調達や焼成の依頼、あるいは代作など、蓮月を助けた。

蓮月自作とされる製品には、二代目蓮月光良の作品が相当数紛れ込んでいる可能性がある。光良の特徴として、「作風は一見蓮月の作品と酷似している」、「技術的には勝れているが素朴性に欠け」る、「必ず陶器の底面や、全体が蓮の葉の形態をもって製作され、作品によっては蓮月の署名の他に「光良山」の印がみられる」との指摘がある⁽⁵⁾。

7)焼成は、三条の粟田口焼、五条の清水焼の窯元、のちには黒田光良へ依頼したこと：借窯で焼成するシステムは、18世紀の乾山焼にすでにみられる。粟田口は陶器焼成を主体とし、清水焼は19世紀以降、磁器生産を盛んにおこない、両窯場は陶土をめぐる争論を起こすなど、対立的な関係も持ち合わせていた⁽⁶⁾。蓮月の居所からは粟田口のほうが近いが、粟田口の錦光山宗兵衛や五条の清水六兵衛との合作作品が伝わっているように、両窯場の陶工と親交があった。焼成の時期や焼成室のあき等を勘案して、蓮月はどちらの窯場にも焼成を依頼したと理解できる。

本稿の課題 1984年、京都大学病院構内の発掘調査で、「蓮月」の銘のあるやきものが多数見つかった。発掘調査で確認された蓮月焼の最初の事例であった。その後、京大病院構内遺跡では、1995年、2001年の発掘調査でも蓮月焼がまとまって見つかっている。出土地点は、いずれも聖護院村時代の蓮月が居を構えた場所ないしはその周辺にあたっており、これらの資料は蓮月焼の生産に関するものとして、重要な位置を占めるだろう。

うえに記したように、蓮月焼は特徴のあるやきものであることから小片でも見分けが付きやすい。京都大学構内では、生産地とは無関係な吉田南構内でも、蓮月焼の出土が報告されており、本年報でも1点出土の報告がある（本年報、第3章－Ⅱ1020）。京都ではこれら以外に、3地点で出土が報じられており、江戸遺跡でも出土例があることを知った。資料検索が十分とはいえないので、ほかにも出土が報告されていたり、新しい時代、あるいは奇妙なやきものとして、未報告のまま保管されているものもあると予想される。

蓮月焼の研究は、世代をこえて残ってきた伝世品によって進められてきた。これに対して、考古資料の出現は、違った角度から蓮月焼に光をあてることのできるのではないかと期待する。そのためには、個々の出土事例を再検討し、基礎資料を整備することから始める必要がある。このような観点から検討作業を進めている最中であるが、この過程で未報告の資料についても、観察・実測などの検討を加えることができた。こうした資料について紹介しながら、考古資料としての蓮月焼について検討する第一歩としたい。

2 出土資料

京都大学病院構内 1984年度（A F 19区）⁽⁷⁾，1995年度（A G 20区）⁽⁸⁾，2000年度（A E 19区）⁽⁹⁾の発掘調査によって，多数の蓮月焼関連資料が出土している。いずれの調査区も病院構内の南東部に位置し，蓮月居住地の周辺にあたっている（図187）⁽¹⁰⁾。

1984年度の調査は，蓮月焼が発掘調査によって初めて出土した事例である。土瓶・急須・徳利・鉢・蓋物など，10数点の資料が廃棄土坑S X 1やその周辺の包含層から，幕末の陶磁器類とともに出土している。報告では，和歌全文の判読できる3点の蓮月焼（徳利・土瓶・鉢）と，「蓮月」と陰刻された急須蓋2点が実測図と写真つきで解説されている。ここでは，新たに6点の資料の実測図を掲げ，解説しておく（図188－1～6）。

1～3は急須。1は底部を除いて，透明釉を施している。底部外面は，型離れの痕跡を残しており，これは少なくとも胴下部は外型を用いて成形したものと理解できる。「ちよこもる まどの 呉竹 日にそへて うれしきふしの 数やかぞへん」（下線は残存文字，以下同じ）と推定する歌を陰刻であらわす。2・3は無釉焼締。ともに陰刻で歌を記す。2の歌は不明。3は「人はかる さがのの のはらの 夕まぐれ おのが尾花や 袖とみすら

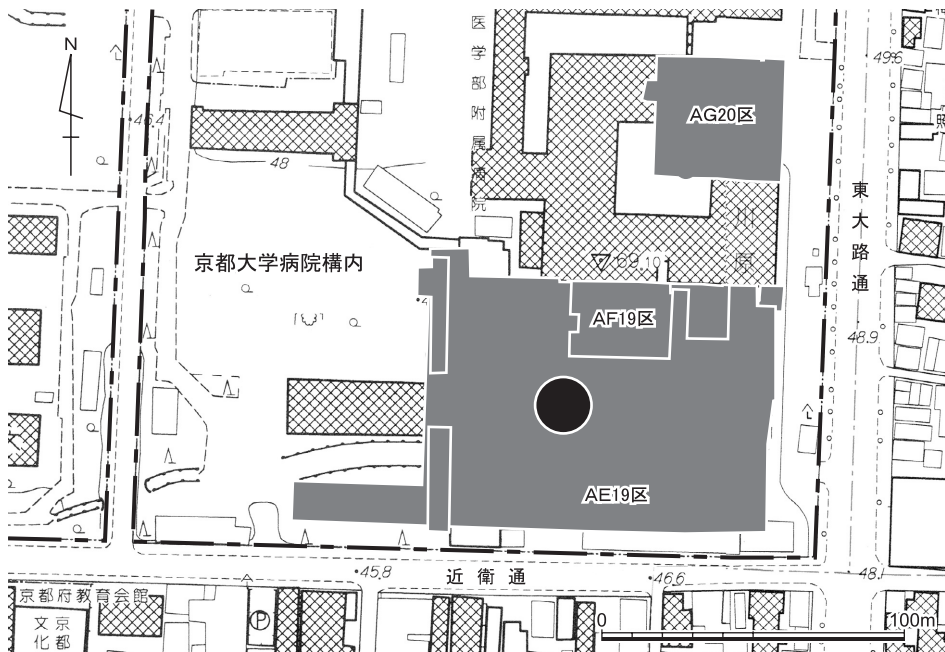


図187 京都大学病院構内の調査地点と推定蓮月居住地（黒丸印） 縮尺1/2500

ん」と推定できる。両例とも、胴下部の器厚は、1.5～2mmの薄さで、おもに内面に指頭による凹凸を残す。3は胴中央部で稜をもつように屈曲し、この稜を境に内面の調整は下部が横撫で、上部が指頭による押さえと調整の仕方が異なっている。器壁の薄さも勘案すれば、胴部は外型を用いて上下別々に製作し、あとで接合した可能性が高い。

4・5は無釉焼締の土瓶の身と蓋。4は内外面ともに、指頭圧痕がみられる。陰刻で文字を刻むが、断片的で歌の判読はできていない。5は土瓶蓋。内面に型痕とみられる圏線があること、外面は指頭による押圧痕がみられるのに対して、内面にはそれがみられないことから、型作りしたうえで、把手をつけたと判断する。裏面中央に、「蓮月作」と刻書する。6は蓋物の蓋。5と同様の特徴を内外面にもつことから、型作りと理解する。三叉状になる把手も、5と類似する。内面中央に、「琴松文子」の陰刻をもつ⁽¹¹⁾。内面は、焼きぶくれが著しい。

1995年度の調査では、土坑および包含層から、急須・煎茶碗・碗・土瓶・皿・蓋物・鉢・香合・涼炉・火炉などが出土した。50個体前後の出土品のうち、29個体を報告した。

すべて破片資料で、蓮月焼最大の特徴である和歌全文が残存している資料は1点もみられなかった。蓮月は多くの歌を世に残しており、一部のみ判読できる和歌が蓮月のどの和歌にあたるのかをつきとめるのは容易なことではない。そこで破片資料から和歌全体を復元するために、歌集にみえる蓮月の和歌800首前後をもとにして簡易データベースを作成した。このデータベースによって、歌が一部分しか残存していない破片資料でも、候補となる和歌を迅速に検索できるようになった。

出土品の特徴として、破損した断面に釉が流れているものや、焼成時のひび割れによって施釉していない面に釉が流れ出たもの、焼成時に生じたと思われるひび割れをもつもの、素焼品などがあり、ほとんどが焼き損ない品とみてよいものであった。このなかには、型作りで蓮葉を表現した蓋物も含まれていた。調査地点は蓮月居宅の裏手にあたる地点であることから、選に漏れた失敗品がこの地点に廃棄されたものと理解できる。

今回、新たに21点を実測し、また先に報告した資料の中で、訂正の必要なものが生じたので、これについても再掲して説明を加えておく（図188・189－7～28）。

7～10は焼締の急須である。いずれも破片資料で、注ぎ口、把手、胴下半部を欠く。7・9には外面に削りの痕跡が認められ、内面は4例とも指頭による押さえとシボリの痕跡がみられる。7は「むさしのの 尾花が末に かかれるは たがひきすてし 弓張の月」, 9は「梅が香に 枕もとらで 更るよの そらに鳴ゆく 春の雁がね」と推定できる歌を陰

刻で表現している。8・10の歌は、判読できていない。

11～16は煎茶碗。16は素焼き段階で止まっており、他は、高台周りを除いて内外面に透明釉を施している。11～13は鉄錆による筆書き、14～16は陰刻で歌を表現するが、断片的な資料のため、13が「梅が香に 枕もとらで 更るよの そらに鳴ゆく 春の雁がね」かと推定できたのみである。12は「蓮月」の署名が残る。14・15は胎土・色調・釉調が酷似する。同一個体の可能性が高い。

17～19は小片であることと歪みがあるため、正確な径が不明である。碗ないしは鉢になると思われる。18は素焼き段階で止まっており、陰刻で「蓮月」と署名している。17・19は内外面に透明釉を施す。ともに歌の判読はできていない。

20から22は急須の蓋。いずれも焼締焼成。20・21は外面を蓮葉型押しで表現する。22も型作りであり、内面に型押しで生じたとみられる細かなヒビがみられる。つまみは、砧をかたどり、内面中央には「蓮月」と刻書する。

23は、先の報告で托とした資料。今回改めて検討した結果、托として報告した別の資料の胎土が白色で精良なのと比較して淡褐色を呈すること、および托としては形態が異例であることなどから、型の可能性が高いと判断するに至った。外面は指押さえの跡を顕著に残し、底面および内面は平滑に仕上げている。上面に粘土を押しつけて、22のような急須の蓋を作るために利用されたと想定する。

24・25は鍋。ほぼ同型・同大の鍋で、25は素焼きの段階で止まっている。24は内面に透明釉を施す。口縁部に把手と注ぎ口がつく。胴部上半は内外面とも、指頭圧痕を顕著に残すが、胴部下半は内外面とも、撫でて仕上げている。25の底部外面には、型押しで生じたとみられるヒビが観察できることから、少なくとも下半部は型成形であると考えられる。

26・27は鍋の蓋。両例とも素焼きの段階で止まっている。釘彫りで歌を記すが、判読できていない。27は「蓮月」の署名をもつ。

28は涼炉。砂粒の多い粗放な胎土を用い、土師質焼成である。体部に、「万世も たえぬ ながれと しめつらむ そのかめの尾の 山のした水」と推定できる歌を陰刻する。

2000年度の調査でも、包含層などから蓮月焼が出土している。この調査では、井戸を転用した廃棄土坑から出土した蓮月焼模倣資料が注目できる。銘文から、これらは聖護院村で医家の一族に連なる玉木良齊なる人物が蓮月焼を模倣して製作したことが判明した⁽¹²⁾。

京都大学吉田南構内 総合人間学部（現、吉田南）構内A R25区の調査で、4点の蓮月焼関連資料が報告された⁽¹³⁾。その後の検討で、新たな知見を付け加えることができたの

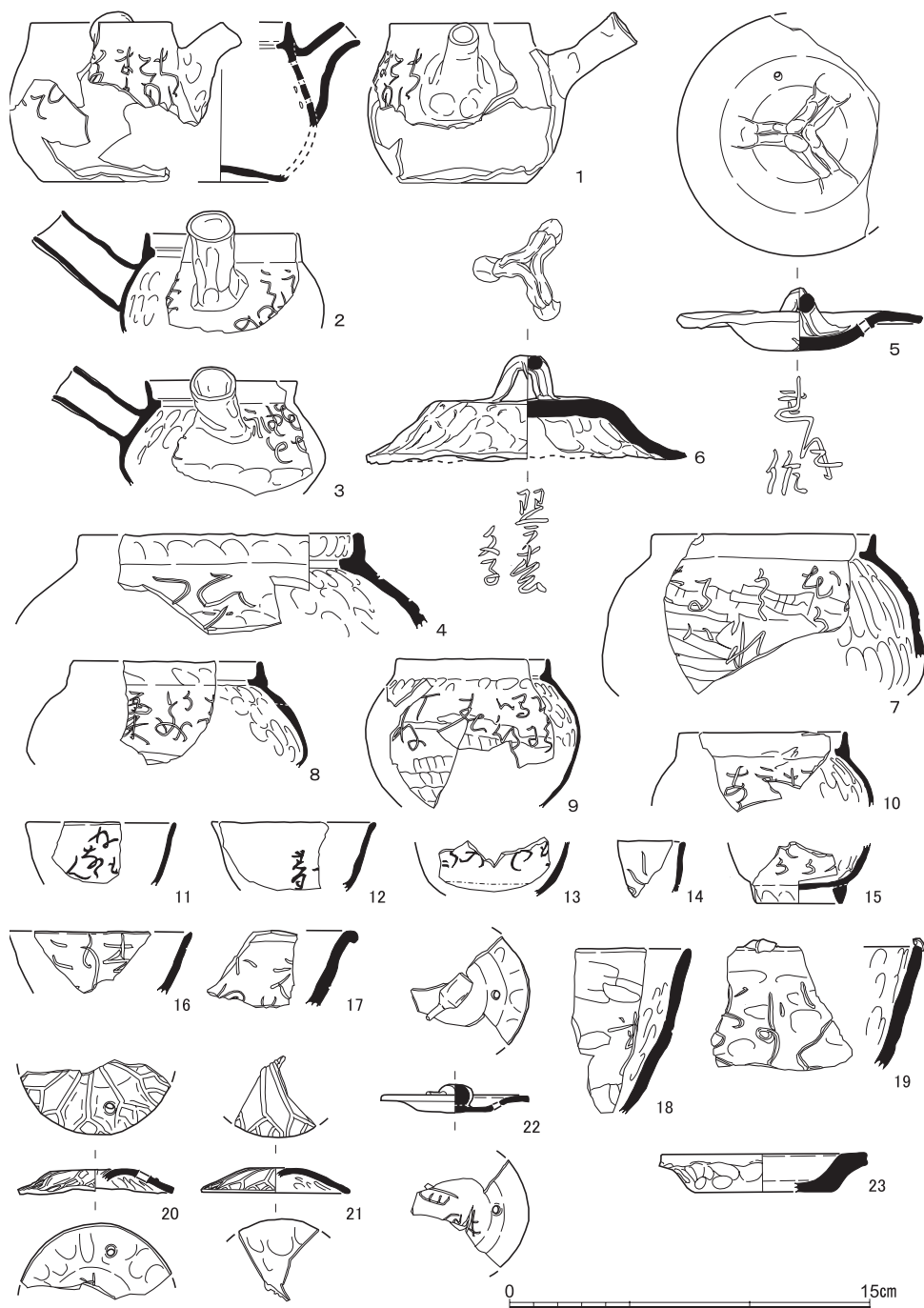


図188 蓮月焼(1) (1～6 京都大学病院構内A F 19区, 7～23 京都大学病院構内A G 20区)
縮尺1/3

で、改めて実測図を掲げておく（図189-30～33）。

30・31は急須。30は口径6.4cmをはかり、焼締焼成品。31は内外面に透明釉を施釉する。把手が剥落した痕跡がある（梨地部分）。32は、口径7cm、高さ4.2cmをはかる煎茶碗。内面に透明釉をかける。外面は、外型によって蓮葉を表現したうえに、「梅が香に さゝぬ外面を 唐猫の しのびてすぐる ゆふ月よかな」と推定する歌と「蓮月」を陰刻で表現する。33は口径6.6cmをはかり、皿状の形態を呈する。底部外面を除いて、内外面に透明釉を施釉する。30・31・33は陰刻で文字を刻み蓮月焼の特徴をもつが、小破片で和歌の特定はできていない。

これらはいずれも幕末の遺物から明治17年（1884）の錢貨を含む包含層から出土している。この時期、この地点には吉田村の畑が広がっていたと想定できるが、東一条通をはさんだ北側、本部構内の地には、文久2年（1862）から明治3年（1870）にかけて尾張藩邸が構えられた。藩邸の建物に用いられた「作」の刻印ある瓦が本調査区から出土していることから、尾張藩関連の遺物がこの地まで及んでいても不自然ではないだろう。したがって、本資料は、吉田村の農民あるいは尾張藩によってこの地にもたらされた可能性が考えられる。幕末以降、煎茶の喫茶が大衆化したとはいっても、農民層まで普及するにはなお時間を要したであろうから、後者の可能性が高いと考えるが、断定は避けておく。

またA R 24区からは、焼締急須の口縁部1点が近世の包含層である灰褐色土から出土している。残存文字から、歌の候補2首が掲げられている（本年報、第3章-II 1020）。

京都大学本部構内 1989年、本部構内A W 27区の調査中に、調査区脇で採集された資料（図189-29）⁽¹⁴⁾。発掘に先立って掘削された表土中に包含されていた可能性が高い。急須で、口縁部から胴部にかけて4分の1弱の破片資料である。胎土は灰白色。手づくね成形で、蓋受け部分をのぞいて、透明釉をかける。歌を陰刻しており、残存文字から、「さそふ水 ありとはなしに うき草の ながれてわたる 身こそやすけれ」に該当しよう。

本部構内西半は、幕末に尾張藩邸となったが、調査地点は藩邸外で東隣の地点にあたる。前記の吉田南構内資料とともに、藩邸関連の資料が分布しても不自然ではない地点である。ただし、表採資料であることから、所有者は保留しておく。

平安京左京北辺四坊（公家町） 京都市埋蔵文化財研究所による京都迎賓館建設に伴う発掘調査で、急須2組が出土した⁽¹⁵⁾。

ひとつは、F区の井戸F 1235出土の身と蓋。焼締焼成。身の口径7.8cm、高さ7.4cm。蓋は、蓮葉を型押し、蓮根を模したつまみをつける。内面に「蓮月」と陰刻する。身に陰刻

出土資料

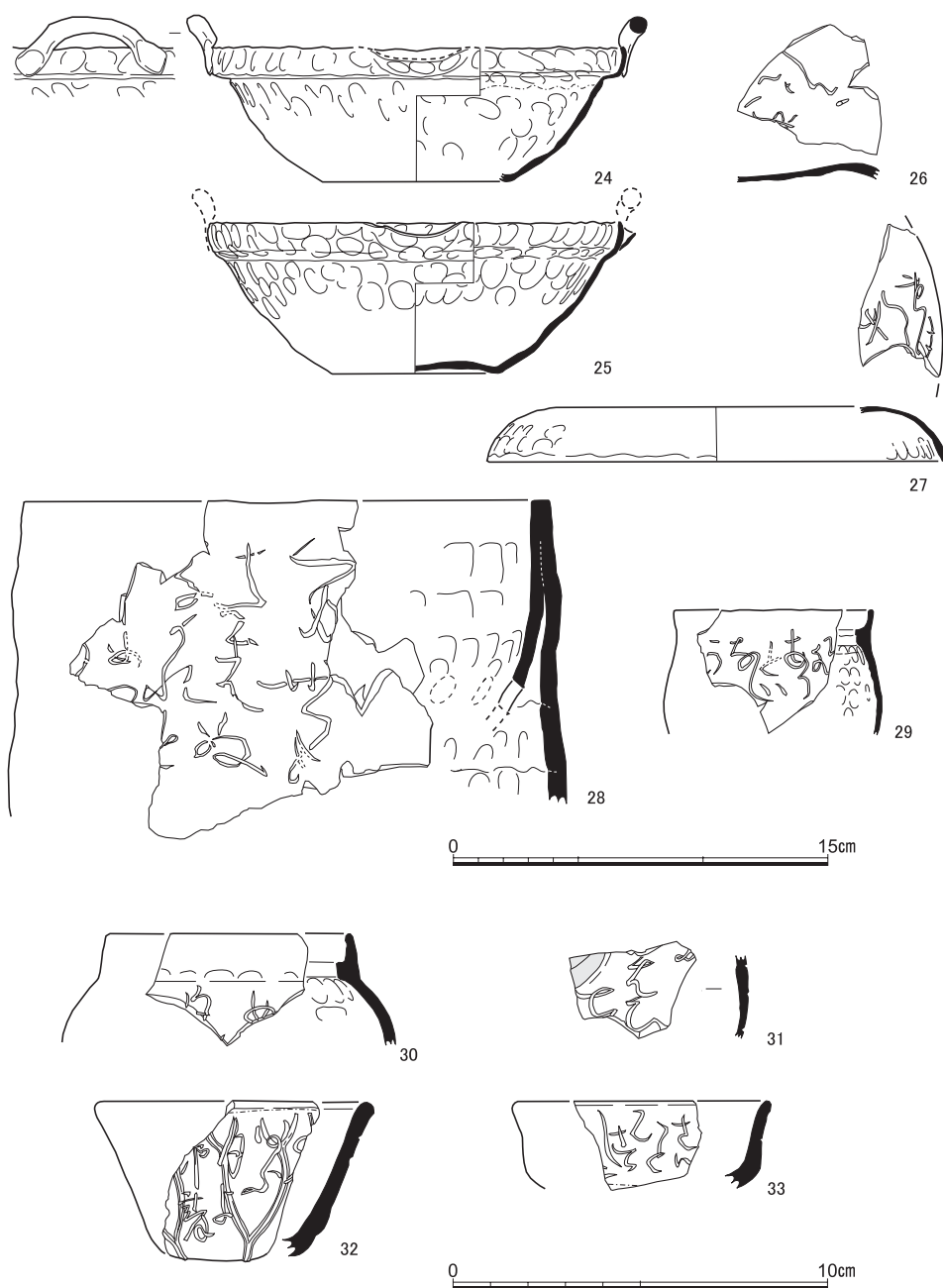


図189 蓮月焼(2) (24~28京都大学病院構内 A G 20区, 29京都大学本部構内 A W 27区, 京都大学吉田南構内 A R 25区) 縮尺1/3(24~29), 1/2(30~33)

で、「梅が香に 枕もとらで 更る夜の そらに鳴きゆく 春のかりがね」の歌を記す。

もう一つは、G区の土坑354出土。焼締焼成。口径6.4cm、高さ6.8cmで、急須1より一回り小さい。「いちじろく 匂へるものを 桜花 雲か雪かと なにまがふべき」の歌を陰刻する。

調査地点は、京都御所の東、仙洞御所の北にあたり、16世紀末、秀吉による京都改造事業によって、公家町として形成された場所である。F区の井戸は、「宅地7」とされた区域内にあたり、ここは江戸前期以降、櫛笥家が占地していた。一方、G区の土坑は、南北にはしる二階町通のうちにあり、道路内に作られた廃棄土坑のようである。この土坑の位置する西側は「宅地6」にあたり、江戸前期以降、柳原家が占地、東側の「宅地22」は家主が頻繁に変化したが、江戸後期には聖護院里坊が占地していた。公家町は、明治2年（1869）の東京遷都で留守宅が目立つようになり、荒廃もすすんだことから、明治10年（1877）内裏の保存と公家町の公園化の方針が出され、調査地周辺は京都御苑内の緑地となった。このような変遷からみて、本地点の蓮月焼は、東京遷都前後に、不用になった器物として廃棄されたものであり、公家層によって所有されていたものと理解できる。

平安宮内裏跡 京都市埋蔵文化財研究所による1984年度の調査で、明治時代の包含層から1点出土した（図190-34）⁽¹⁶⁾。手づくね成形、指頭圧痕を内外面に残す椀。口径11.4cm、高さ5cm前後。口縁部内面にわずかな欠損がみられるのみで、ほぼ完存する。鉄錆を用いて「わかやとの 垣ねはかりに 有明の 月とみるまで 咲るうの花」の歌を書き、「蓮月」と署名し、高台脇から高台部をのぞいて透明釉をかけている。高台は削り出しで、高台内に、へら状工具による2条の圈線が巡っている。

調査地点は、江戸時代以降、町屋の形成された場所であり、明治時代に入っても、土地利用のあり方に大きな変化はみられなかったと想定できる。都市の町人層によって、この地にもたらされたものと推定しておく。

平安京左京六条三坊七町 京都文化博物館による1994年度の発掘調査で、土坑から1点出土している（図190-35）⁽¹⁷⁾。口頸部が外反し、底部は欠損する。建水であろうか。復元口径10.6cm。手づくね成形で、指頭による凹凸を残す。内外面とも透明釉をかける。陰刻された文字が6字残存しており、「水ぬるむ いけのかわづの 声きけば やがてねむりぞ もよふされける」という和歌を記した蓮月焼であると推定できるが、刻書したときに生じる粘土屑が端に残り、また文字も直線的で、刻みも浅く、他の出土例・伝世品と比較して稚拙であることが注目しうる。

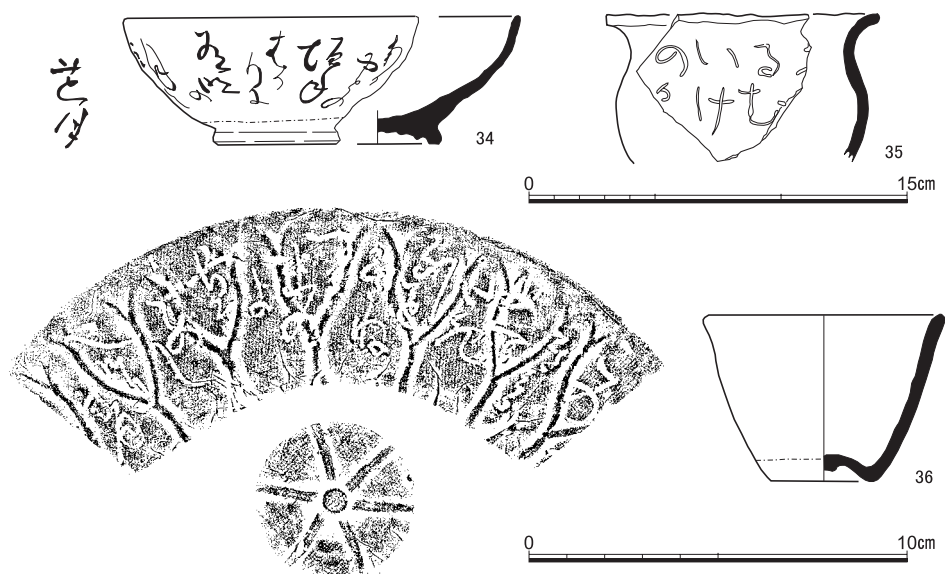


図190 蓮月焼（3）(34平安宮内裏跡, 35平安京左京六条三坊七町, 36駒込東片町)
縮尺1/3(34・35), 1/2(36)

土坑出土であるが、伴出遺物が報告されていないので、廃棄の年代は不明である。この調査では、元治元年（1864）の大火に伴うとされる、別の廃棄土坑からヨーロッパ陶器が出土しており、これに関連して調査地の所有者の考察がなされている。それによれば、幕末期の調査地は、伊予宇和島藩京屋敷か商家の可能性はあるが、特定することはできなかったとのことである。

駒込東片町遺跡 以上はいずれも京都出土の例であるが、東京都文京区の大縄拝領武家屋敷（組屋敷）跡地からも、蓮月焼2点が報告されている⁽¹⁸⁾。いずれも煎茶碗である。

図190-36は完形品で、口径6.2cm、高さ4.4cm。口縁部がわずかに端反りとなる。外型作りで、内面は指押さえによる凹凸がみられる。外面は、蓮葉を型押しで表現したうえに、「このきみは めでたきふしを かさねつつ 末のよ長き ためしなりけり」の歌と「蓮月」の署名を陰刻する。胎土は乳白色で、底部外面をのぞいて透明釉をかけている。遺構外の出土である。

もう一つの煎茶碗については、実見できなかった。報告書には36と並んで原色写真が掲げられているが、それ以外の記載がない。写真から観察できることだけを記しておこう。

36と外形は類似するが、一回り小さい。4分の1ほど欠損するようである。36同様、外面は蓮葉を型押しで表現した上に和歌を陰刻している。写真で判読できる部分から「ふるき世を おもひねざめの 耳づかに 秋の声きく をぎの上かぜ」(下線、判読部分)とい

う和歌に該当しそうである。内面は施釉し、外面は無釉としている。形態・文様・施釉法は、京大吉田南構内遺跡出土の32に類似している。

調査地点は、17世紀後半以降、御先手組および御持組同心の大縄拝領武家屋敷（組屋敷）となっており、明治2年（1869）に新政府によって上地され、居住者が変更したことが、詳細な文献調査から明らかになっている⁽¹⁹⁾。明治2年までにこの地にもたらされたものであれば、武家によってもたらされた可能性が高いが、明治2年以降であれば、居住者が特定されていないので、所有者を特定することは困難である。遺構外の出土であり、共伴資料が提示されていないので、これ以上の追究は困難である。

3 小 結 —まとめと今後の課題—

発掘調査で出土した蓮月焼は、以上のとおりである。京大病院構内遺跡での出土数は多いものの、他の遺跡では1点から数点どまりである。なお、新たな資料の出現に期待する部分が多いけれども、現状での知見をまとめ、今後の課題を記して結びとしたい。

遺跡の性格 出土遺跡の性格は、生産地遺跡と消費地遺跡に大別できる。前者は、京都大学病院構内遺跡であり、後者は残りの遺跡が相当する。

京大病院構内遺跡での出土地点は、すでに記したように、聖護院時代の蓮月が居住したと推定される地点の周辺域にあたっている。焼き損ない品が多く出土していることから、多量に出土した蓮月焼の多くは、焼成後、蓮月の居宅で選別され、失敗品として廃棄されたものと理解できる。

一方、蓮月焼の出土した消費地遺跡の中身をみると、公家地、武家地、町屋などがあり、階層的な偏りはみられない。むしろ、出土資料が僅少であるにもかかわらず、多様な階層が推定できることから、蓮月焼が社会階層の別なく、広く浸透したことを物語っている。蓮月焼は当時、京みやげの最上のものとみなされ⁽²⁰⁾、京、江戸といった大都市ばかりでなく、全国各地へもたらされているので、京、江戸以外での出土例も今後十分に期待することができるだろう。

年 代 資料の年代を考えるにあたっては、製作年代と廃棄年代の2つの観点からの検討が必要となる。製作年代については後述することにして、ここでは廃棄年代すなわち出土状況・伴出資料について、簡単にみておこう。

遺構出土には、土坑や井戸から出土している例がある。京大病院構内A F 19区の土坑は廃棄土坑で、幕末の陶磁器を伴出しており、明治時代の下る遺物は伴っていない。平安

京左京北辺四坊（公家町）では、井戸と土坑から出土している。ともに伴出した遺物の報告はなされていないが、井戸については「19世紀前半代の出土遺物がある」⁽²¹⁾との記載がある。平安京左京六条三坊七町も土坑出土であるが、伴出資料は示されていない。

上に記した資料以外は、基本的に包含層出土資料である。京大病院構内A G 20区資料の多くは灰褐色土から出土しており、この包含層は幕末までの遺物を含むものの、明治時代の遺物は出土していない。京大吉田南構内出土例、平安宮内裏跡出土例は、明治時代の遺物を含む包含層から出土している。

生産地遺跡である京大病院構内出土例は、遺構・包含層ともに、幕末の資料に伴出しており、明治時代の遺構・遺物に伴った確実なものはない。嘉永～文久年間にかけてこの地に蓮月が居住し生産をおこなったことと符合すると考えてよく、先述したように出土資料の大半は、生産過程において生じた失敗品とみることができる。

一方、消費地出土遺跡では、廃棄年代が明治時代に下ると想定できるものがいくつかある。生産から商品として流通し、消費を経て廃棄まで、ある一定時間を要することを考慮すれば、このような年代的ズレは当然生じるだろう。

製作技術 従来、蓮月焼の製作技術については、手づくね（手捻り）の一語で説明されてきた。手づくねとは、「轆轤や型を用いずに手づくりで成形すること」であり、「粘土を少量取って、指先や掌でこねて引き伸ばし、形を整えていくことから、ほとんどの小型製品の成形に向いている」とされる⁽²²⁾。

蓮月焼が轆轤水挽き成形せずに、手づくね技法を用いていたことは発掘資料からも観察されるが、手づくね技法ばかりでなく、型づくり技法も多用していた可能性を指摘しておきたい。たとえば、蓮葉の意匠を表現した煎茶碗や蓋などは明らかに型づくりで成形している。ただしこうしたタイプの伝世品は、2代蓮月（黒田光良）の製品とされている。蓮葉型押し＝2代蓮月という分類が可能かどうかは改めて検討しなくてはならないと考えているが、従来の研究成果に従って、とりあえずは蓮月自作の製品とは区別しておく必要があるかもしれない。しかしこのような明瞭な型づくり品以外にも、型押しで成形しているとみられる蓋や急須が存在する。急須などには、器壁の厚さが2mmに満たない薄さのものもあり、水挽きではなく、型も用いずに、手づくね技法でこれらを成形することはかなりの技量を要するだろう。さらに、急須の底部には、型離れと推定できる痕跡をもつものや、胴部最大径の部分に不自然な稜をもつものがある。上下を別々に型作りした上で接合したと考えると理解しやすい。急須蓋の型と想定できる資料が京大病院構内遺跡から出土

している。蓮月焼といえば、手づくねと理解されてきたが、器種によっては型づくりも成形技法の大きな部分を占めていたのではないか⁽²³⁾。伝世品においても、製作技術に関する再検討が必要であると考えている。

様式としての蓮月焼 蓮月が製陶をはじめたのは養父と死別した40歳前半代で、84歳で亡くなるまで約40年間、作陶している。当然、様式論的変遷も想定されるが、そのような観点からの検討は、従来ほとんどなされていない。詳細な検討は、のちに譲りたいが、仮に次のように3時期にわけて検討を進めることができると考えている。

蓮月焼前期：40歳代～60歳ごろ

岡崎時代

蓮月焼中期：60歳代～70歳代前半，基準資料は，京大病院出土品

聖護院時代

蓮月焼後期：70歳代後半～84歳，基準資料は，年齢記入作品

西賀茂時代

蓮月焼前期は天保～嘉永年間，蓮月42～60歳の時期。この時期，蓮月はおもに岡崎に居を構え，製陶をおこなっていた。この時代に比定されている製品は，伝世品においてもほとんどないようである。蓮月焼の成立を考えるうえでは，重要な時期であり，この時代の製品を同定してゆくことが今後の課題として重要であろう。

蓮月焼中期は，嘉永年間～文久年間，蓮月60歳代から70歳代前半の時期。この時期，蓮月は聖護院村に居住しており，上に述べた京大病院構内出土資料は，蓮月の聖護院居住時代の一括資料と理解できることから重要である。出土品は焼き損ない品が廃棄された状況を示しており，聖護院時代の蓮月焼の基準資料と理解することができる。

蓮月焼後期は，文久年間～明治8年，蓮月70歳代後半から85歳の時期。文久3年(1863)，蓮月は西賀茂へ移り，慶応元年には晩年を過ごすことになる神光院の茶所へ移ることになる。そしてこの頃から，署名のほかに年齢を記入することが多くなったようで，「蓮月 ○○歳」と記した伝世品が数多く残されている⁽²⁴⁾。年齢を記入する一群に代表される資料群を西賀茂時代として理解することができる。現状では，年齢を記入したものは，発掘調査では出土していない。

こうした蓮月個人の様式的変遷とともに，蓮月焼が蓮月自作の製品とはかぎらない，ということも十分に注意しなくてはならない。繰り返しになるが，蓮葉型押しの資料などは，従来，2代蓮月の作風と理解されてきたものである。「琴松文子」あるいは「良斉」といった署名資料は，蓮月自作のものとは明らかに区別しうるが，「蓮月」という署名をもつものの中から，蓮月自作品とそれ以外を区分することは，現状では困難である。むしろ，最初に記したような特徴をもつ資料群（伝世品・発掘出土品）を「蓮月焼様式」として規

定し（その中には、2代蓮月資料から、文子蓮月、良齊模倣資料は当然のこと、贋作も含まれることになる）、器種・和歌・署名・製作技術といった観点から、分類をおこない、その多様な実態を正確に把握する作業を進める必要がある。その上で、詳細な分類・観察が個人の識別や個人における作風の変遷へと至るのかを検討するべきであろう。

考古資料に基づく蓮月焼の研究は、まだその緒についたばかりで、上に述べたように多くの課題が残っている。こうした課題に取り組みつつ、最終的には伝世品もあわせた総合的検討を進めなくてはならない。伝世品と考古資料の総合的研究が新たな研究の地平を切りひらくことは、桃山陶器、伊万里、九谷、乾山、あるいは珉平などの最新の研究状況を見れば、明らかである。本稿が、蓮月焼というやきものに関心を払ってみようというひとを増やす契機となれば、さいわいである。

〔注〕

- (1) 大田垣蓮月の生涯および蓮月焼一般については、以下の文献から学んだ。
 - ①村上素道編『蓮月尼全集』、蓮月尼全集頒布会、1927年（思文閣、1980年、増補復刻版による）
 - ②成瀬慶子『大田垣蓮月』同文館、1943年（大空社、1994年復刻版・伝記叢書146による）
 - ③徳田光圓『蓮月尼乃新研究』三密堂書店、1958年
 - ④湯本喜作『大田垣蓮月研究』角川書店、1965年
 - ⑤成瀬慶子『蓮月尼』同成社、1971年
 - ⑥徳田光圓ほか『蓮月』講談社、1971年
 - ⑦杉本秀太郎『大田垣蓮月』淡交社、1975年
 - ⑧前田詠子『蓮月』文人書譜11、淡交社、1979年
 - ⑨徳田光圓ほか『大田垣蓮月』講談社、1982年
 - ⑩京都府立総合資料館『大田垣蓮月』（特別展図録）、1984年
 - ⑪三好 一「和歌とやきもの 大田垣蓮月 上・下」日本美術工芸575・576号、1986年
- (2) 蓮月の履歴書に、「陶器は江州信楽式 土は京都の神楽岡 陶器窯元は三条帶山 五条清水六兵衛依頼 又は下川原黒田等なり」（前掲注1、①文献所収の「大田垣蓮月伝」、61頁、⑩文献では、この履歴書は、黒田光良（2代蓮月）が写したものとするとある。伝世品とともに、蓮月焼を知る上で、重要な情報であろう。
- (3) 徳田光圓「蓮月の陶刻と書風」前掲注1、⑨文献、219頁。
- (4) 前掲注1、①文献、消息篇（160）。
- (5) 徳田光圓「蓮月の陶刻と書風」前掲注1、⑨文献、219頁。
- (6) 森谷勉久「地域産業の新展開」『京都の歴史』第6巻、1973年、219-233頁。
岡 佳子「文献伝承からみた窯と開窯伝承」『窯構造・窯道具からみた窯業』、2005年。
- (7) 浜崎一志・宮本一夫「京都大学病院構内A F 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』、1987年、図27。
- (8) 千葉 豊「京都大学病院構内A G 20・A F 20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』、2000年、図62～図66。

- (9) 現在、整理中。次年度報告の予定である。
- (10) 蓮月の居宅の推定位置は、富岡鉄斎が安政～文久の頃の様子を描いた「聖護院村略図」との比較対照による（前掲注7文献）。
- (11) 垂水文子という女性が蓮月について作陶を学び、「文子蓮月」と称される類似品を製作した（前掲注1，②文献，114-117頁，⑤文献，90-92頁）。「琴松文子」は垂水文子と同一人物の可能性はある。
- (12) 1995年度の調査でも，1点だけ該当する和歌が判明しなかった資料があり（前掲注8文献－遺物番号Ⅱ415の鉢），蓮月焼でない可能性を指摘しておいたが，2000年度の調査で，玉木良斉なる人物が蓮月焼を模倣して製作した資料であることが判明した。これらは，手づくねないしは型作りで，玉木良斉自詠の和歌を刻むという点では，蓮月焼と同じ特徴をもち，「蓮月焼様式」のなかで理解することも可能である。ただしこれらはすべて，「良斉造」，「良斉戯造」といった署名をしており，蓮月焼の贋作とは本質的に異なっている。これら玉木良斉による蓮月焼模倣資料については，現在整理中であり，別途詳しく報告する予定でいるので，参照いただきたい。
- (13) 伊藤淳史「京都大学総合人間学部構内A R25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1996年度』，2000年，図39－I 563～I 565。
- (14) 難波洋三氏（当時・埋蔵文化財研究センター，現・京都国立博物館）により採集され，京都大学埋蔵文化財研究センターで保管する。未報告資料であり，難波氏には，資料の公開をご快諾いただいた。
- (15) 京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京北辺四坊』（第2分冊），2004年，図版444－13・14，図版517－29。資料調査にあたって，能芝勉氏，中村敦氏，小森俊寛氏にお世話になった。
- (16) 梅川光隆「平安宮内裏」『平安京発掘調査概報 昭和60年度』，1986年，京都市埋蔵文化財研究所，図版15－59。資料については梅川光隆氏にご教示いただき，調査にあたっては中村敦氏にお世話になった。
- (17) 定森秀夫編『平安京左京六条三坊七町』京都文化博物館調査研究報告第11集，1995年，第104図－7。資料調査は，植山茂氏にお世話になった。
- (18) リチャード・ウィルソンほか『駒込鰻縄手 御先手組屋敷』都立向丘高校地点における埋蔵文化財発掘調査報告書，1997年，巻頭図版16。資料の存在を赤松和佳氏にご教示いただき，調査にあたっては，R・ウィルソン氏，安孫子昭二氏にお世話になった。
- (19) 村田香澄「文献調査」前掲注18文献所収。
- (20) 前掲注1，⑦文献，221頁。
- (21) 前掲注15文献，37頁。
- (22) 矢部良明ほか編『角川 日本陶磁大辞典』，2002年，942－943頁。
- (23) 先に言及した蓮月焼の模倣品を製作した玉木良斉関係資料には，急須・土瓶・椀・蓋などを製作するために用いた型が多量に含まれている。
- (24) 前掲注1，⑨文献。